



第25代専如門主伝灯奉告法要 首都圏協賛行事

次世代リーダーズサミット

開催報告



テーマ「誰一人取り残さない」

浄土真宗本願寺派第二十五代門主に就任された専如門主は、ご親教「念仏者の生き方」において、テロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が私たちの自己中心的な心を原因としていると指摘されました。その上で、誰一人残さず救いとするという阿弥陀如来の願いをいただく私たちが、仏さまのお心にかなう生き方を目指し、一人ひとりが世界の幸せのために行動していくことの大切さをお示しくございました。

世界規模で頻発する困難な問題の解決を目指した動きは、世界中で始まっています。国際連合加盟国は、二〇一五年九月、「誰一人取り残さない——No one will be left behind」を理念に、二〇三〇年を目標年と定め、貧困・飢餓・不平等・環境など十七の目標、「持続可能な開発目標」SDGs (Sustainable Development Goals) を設定し、広範な課題に統合的に取り組む必要性を呼びかけました。SDGsという世界規模の目標から様々な取り組みを見返すことで、既存の活動の見直し、具体的な活動の展開、諸活動の相互連携を生み出すことが必要とされています。

十一月八日に築地本願寺で開催された第二十五代専如門主伝灯奉告法要首都圏協賛行事「次世代リーダーズサミット 仏教×SDGs」は、ご門主の「念仏者の生き方」を受け、次世代を担う人びと（次世代リーダーズ）が主体となり諸問題の解決に寄与していけるよう、SDGsから学びを深めるために企画されました。

本号では、慶應義塾大学大学院教授蟹江憲史氏による「SDGsの理念と現状」、国連広報局アウトリーチ部部长マーヘル・ナセル氏による基調講演を報告いたします。

講義「SDGsの理念と現状」

慶應義塾大学大学院教授

蟹江憲史氏



〈略歴〉 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授、国連大学サステイナビリティ高等研究所シニアリサーチフェロー。著書に、『持続可能な開発目標とは何か―二〇三〇年へ向けた変革のアジェンダ』（ミネルヴァ書房、二〇一七）。

■SDGsの理念

SDGsには、十七の目標をあらわす非常に見やすいアイコンが作成されています。そして、この目標のもとに、さらに一六九個のもっと具体的なターゲットが示されています。この目標とターゲットの全体を「持続可能な開発目標（SDGs）」と呼んでいます。

SDGsの理念として、二つの柱から

説明いたします。

一つは世界を変革することです。世界では環境問題をはじめ、格差や人権、テロや虐殺などいろいろなひどい姿が表面化しており、このままでは、地球は持続できないと警鐘をならす科学者もいます。

こうした地球規模の問題を解決していくためには、変化ではなく、変革する必要性があります。もう一つは、SDGsのスローガンにもある「誰一人取り残さ

ない」世界をつくるということです。この二つの理念を柱にして活動を行わなければ、世界は持続できないという危機感がSDGsの一番の土台にあります。具体的にSDGsとはどのようなものかという点、先進国や途上国、小国や大国などの違いを越えて、全ての国に普遍的に適用され、全ての国が一律で目指していくべき姿であるということです。目



標達成をどうするかという方法は、国や立場によって異なります。しかし、課題の解決に関係するあらゆる問題や事柄、そして全ての人やもの、ことがつながりあい、目標を目指していくということです。

この目標達成のために進んでいく一方で、どこまでできているのかを測る必要があります。そのために、二〇一七年七月に二三〇余の指標が定められました。

具体的な目標を掲げ、二〇三〇年という年限を決め、そして進捗を測る。これがSDGsです。

■あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を撲滅する

具体的な事例として「貧困」を取り上げます。SDGsでは、国連で「一日一・二五ドル以下」と定義されている絶対的な「貧困」を、二〇三〇年までに根絶しようという目標が掲げられています。日本に関しては、対外援助などの話

だと思われる方も多いかもしれませんが、ターゲットの一つには、各国で定義された貧困を半減しようということも書かれています。日本国内では、格差が非常に大きな問題となり、人口の六人に一人がいわゆる「相対的な貧困（※一般に平均収入の半分以下で生活を営む人たち）」とされています。こうした人たちをまさに誰一人取り残すこともなく、二〇三〇年までに、少なくともその割合を半減しようということが示されています。こう見ていけば、日本の直面する課題が書かれていることとなります。

■三つの新しい「つながり」

SDGsについて、三つの新しい点を紹介します。

一つ目は、「つながり」です。SDGsでは十七の目標が掲げられています。この目標は包括的な目標であるということになります。

例えば、「消費」という目標において



は、お昼ご飯を食べることも、銀座に行つて何かを買うことも消費行動の一つです。こうした行動の一つ一つから、いろいろなことがつながり、認識しやすくなっているのが、SDGsの一つの特徴です。包括的であるからこそ、何か入り口が一つあれば、いもづる式にいろいろなことにつながります。

これには、われわれが住む地球の状況

が、かなり危機的であるという前提があります。包括的な目標であることを木の図で説明します。ここでは、経済が一番上にあり、社会がその裾野にあつて、一番下の裾野は環境になっています。つまり、環境の枝葉がしっかりと伸びていなければ、経済も社会も充実してこないというイメージで書かれています。

こうしてイメージされる理由は、一九五〇年から見られる急激な変化が背景にあります。一九五〇年あたりから社会経済的な傾向、例えば、電気の利用、水の利用、ダムの大ささなどが右上がりに急激に伸びていきます。この頃の日本は、高度経済成長の時代に入り、生活も豊かになりましたし、複数の国でそうしたことが同時に起こり、足し算ではなく、掛け算的にどんどん消費が増えていきました。その結果何が起こったかといえ、二酸化炭素の排出量、メタン排出量など、環境に関する様々なデータもことごとく一九五〇年を境に急激に右肩上がりになっていきました。

今、世界の人口は約七十億人といわれており、二〇五〇年には九十億人以上になると予想されています。これまでのようなパターンの成長を繰り返していけば、かなり大きな問題が出てくるのが容易に想像できます。こうした状態を革新するためには、入り口が一つだとしても様々なことをつなげて考えることが必要です。



例えば、食料廃棄物を二〇三〇年までに半減するという目標については、飢餓やエネルギー、水の問題にも関係すると指摘されています。一つの行動を取ることが、いろいろなものにつながっている。ある一つの行動を変えることが積もり積もって大きな動きとなり、現状を革新することにつながる。そういうことを意識しながら行動し、認識するための一つのツールがSDGsです。

■三つの新しさ②、仕組み

二つ目は、仕組みです。通常、国連では条約や議定書などのようにルールを決めますが、SDGsにはルールがありません。ただ目標があり、到達点(達成度)を測るということですが、これまでは、ルールがあり、それを積み重ねていって、今までできなかったことを一歩踏み出そうという考え方でした。しかし、SDGsの場合は、変革を求めていますので、一歩では足りない。そこで、SD

G sでは、目指すべきところを示し、あとは皆さんが考え、イノベーションを起こしましょうという考え方を採っています。イノベーションは、やるべきことに向かつて今まで想定できなかったような様々な結び付きを生み出すことで、作り出されます。

■三つの新しき 〜三、物差し(測り方)〜

三つ目は、物差し、測り方です。SDGsは、二〇三〇年の目標ですから二〇三〇年に達成していれば良いのですが、夏休みの終わり、八月三十日に急いで宿題をやってもなかなかできないのと同じように、少しずつ積み重ねてやっていくことが大事になります。未来の基準で測る、未来にどこまで近づいたかというかたちで測るといことです。

この時、「誰一人取り残さない」世界を考えると、数値で測れるものと測れないものがあります。例えば、路上生活者

の方々ほとんど統計データには載ってきません。だけど、「誰一人取り残さない」を考えると、そうした人たをいかに救済し、一緒に成長していくかが重要になります。そういう意味で、数値で測るものと数値以外で測るものという二つでSDGsは進捗を測ろうとしています。

■小結 〜十三年で世の中は劇的に変わる〜

ニューヨークの五番街の写真をあげました。非常に人通りの激しい場所ですが、一九〇〇年(左)には、馬車しか通っていません。しかし、一九一三年(右)には、車しか通っていません。十三年あれば、世界は本当に大きく変わることができるといことです。

大きく変わるためには、個人、組織、そして、このころのレベルで、いろいろなことが変わる必要があると思いますが、実際変わった例はあるわけです。今か



ら十三年後、二〇三〇年までにSDGsを達成するというのは、不可能なことではないと思いますので、そのためにどうすればいいのかを皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。

SDGsシンポジウム「誰一人取り残さない」基調講演

国連広報局アウトリーチ部 部長

マーヘル・ナセル氏



〔略歴〕 国連広報局アウトリーチ部部長。ビルゼイド大学卒業。ガザやエルサレム、アンマン、カイロ、ウイーン、ニューヨークで国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）や国連薬物犯罪事務所（UNODC）など、三十年以上国連において様々なポストを歴任。一九九一年に開かれた中東和平会議ではパレスチナ交渉チームの一員として参加。

■二〇〇年前と今

この度はこのような貴重なイベントにお招きいただきましたこと、心より御礼申し上げます。本日お集まりの多くの方が仏教徒として、慈悲の心や縁起の思想に基づいて様々な社会課題に取り組んでおられると伺っています。このことは、仏教徒の皆さまとSDGsが極めて高い親和性を本来的に有していることを意味

すると理解しています。

歴史を振り返りますと、人間は長年にわたって進歩を遂げてきました。わずかに二〇〇年前の一八〇〇年代、世界人口の九五％は強度な貧困の中で暮らし、九〇％以上の人は読み書きができませんでした。しかし現在は、平均寿命は延び、多くの人が学校に通っています。乳児死亡率も減少しました。天然痘は根絶され、ポリオも間もなく姿を消すでしょう。しかしながら、技術革新の背景で、

新たな世界的な問題が発生しています。例えば気候変動や不平等の拡大です。これらは目に見える二つの大きな課題です。

■MDGsの成り立ちと成果

「国連は、各国政府のため」の議論の場である」と勘違いをする方が多くおられますが、「国連憲章」には、国連は「政府のため」ではなく、「われら連合国の人民」すなわち私たち一人ひとりのためにあると明記してあります。

「国連憲章」ではさらに、「社会的進歩と生活水準の向上とを促進すること」を「われら連合国の人民」が一丸となって取り組むことが求められています。そのために、SDGsに先立ち二〇〇〇年に採択されたのが、「ミレニアム開発目標」（MDGs）でした。

MDGsには「極度の貧困と飢餓の撲滅」など八つの目標が定められ、開発途上国を先進国が支えるという仕組みでし

た。MDGsは、二〇一五年までに貧困で暮らす世界人口を三六%から一二%にまで減少させるなど、確かに多くの成果を挙げました。しかし、アフリカのサハラ砂漠以南などでは、残念ながら貧困の問題は未達成に終わってしまいました。

■いまだに消えない「貧困」

今日の世界人口約七十五億人のうち、一〇・二%が「極度の貧困」状態にあるとされます。世界銀行では一日に一・九ドル以下（約二〇〇円）で生活する人を「極度の貧困」と定義しています。

現在、毎日の食事を手にすることができない人口が七億九、三〇〇万人、つまり十人に一人が飢餓に苦しんでいます。一方、食料として生産されている食品の三分の一が廃棄されています。また、世界の七人に一人は電力供給を受けていません。六億六、三〇〇万人が安全な水を手にすることができていません。多くの地域で女性や女兒が数キロ歩いて水を汲

みにいかなければならない状況があります。家族のために水を汲み、薪を集めなければならず、そのために彼女たちは就学できません。彼女たちが容易に貧困の連鎖から抜け出せない現実に思いを馳せてみてください。

■SDGsのはじまり

MDGsの最終年である二〇一五年が近づくとつれ、各国政府の首脳や関係者たちは、MDGs以降、どのようにすべきかについて議論を始めました。MDGsが十分に達成されていない状況の中で、次にどのような行動を取るべきか。政府、市民社会など、様々なセクターから一千万人以上にのぼる方々が関与し、二〇一三年にわたって次の最優先課題について協議・議論・交渉が行われました。

そうしてついに、「持続可能な開発目標」(SDGs)の十七の目標が決まりました。十七の目標については、「多過ぎるのではないか」という意見を受ける

ことがあります。私は次のように答えます。「では、あなたはどの目標を外すべきだと思いますか」。貧困。飢餓の撲滅。健康や教育。ジェンダー平等。水へのアクセス。エネルギー。経済成長。気候変動。どれも重要であることは言うまでもありません。だからこそ、SDGsは国連総会において全会一致で採択されたのです。

私は国連の組織で三十年にわたって働いてきました。その経験からしても、確かに国連は完璧な組織ではありません。しかしながら、国連は世界の首脳が集い、議論し、そして合意のもとに地球規模の課題解決のための国際法をつくる重要な機関です。SDGsに関して言えば、目標を達成するには政府、あるいは国連任せというかたちでは、達成できません。若い世代や宗教団体、会社や教育機関など、そして、一人ひとりの力が必要とされています。

■「予防」の重要性

今、世界では様々な紛争があります。紛争の「予防」こそが人々の命を救い、経済的な資産の破壊を守り、社会の好循環をもたらします。

例えば、シリアで二〇一一年の三月から紛争が始まり、現在（二〇一七年十一月）もまだ続いています。一旦対立・紛争が始まってしまうと、なかなか終わりません。ですから、できる限り効果的に紛争を予防することが不可欠であり、対話が求められます。

昨年は、先進国によって途上国支援のために一、三五〇億ドルを超える予算が組まれました。非常に多額ですが、世界の軍事費を見ると、毎年一兆八、〇〇〇億ドル近い金額が支出されています。われわれは何を優先課題とし、何に資金を提供していくのか、世界の政治家に訴える必要があると思います。

軍事費に費やされているこの金額をそ

他の諸問題解決のために使えるなら、ほとんどの問題が解決できると考えられます。

■将来世代に何が残せるのか

〜多くの深刻な課題〜

どんなに長い旅路も小さな一歩から始まります。一歩一歩が重要です。歴史の夜明けから今日まで、全ての世代は次の世代によりよい未来を残そうとしてきました。そして大半の場合、実際そうなってきました。

私は難民の両親のもとに生まれましたが、国連の学校に通い、今こうして国連で仕事をしています。私の子どもたちは、私よりも、はるかにいい暮らしをしているように思えます。

しかし将来世代に対して、よりよい未来を本当に残せるのか。今、技術進歩によって受け継がれてきたものが脅かされています。もしかしたら、将来世代に暗い未来しか残せないかもしれません。

気候変動は、人間の存在に関わる最も深刻な脅威です。われわれは一層力を尽くして、この問題に対処していく必要があります。国連事務総長も、気候変動こそが今の時代の最大の脅威であると繰り返し述べています。われわれは貧困を撲滅することのできる最初の世代ですが、同時に、気候変動を食い止めることができる最後の世代でもあります。

気候変動は人口増大・都市化・食品の安全保障・水不足などとも密接な関係にあります。前例のない最大級のハリケーンや砂漠化や干ばつなどの自然災害も頻発しています。その規模はかつてない規模へと発展し、経済面でも大きな被害をもたらしています。それによって人々は避難や移動を余儀なくされています。そのような状況の先に待ち受けているのはさらなる緊張や紛争です。

■避難民の現状〜不平等な世界〜

現在六、六〇〇万人が避難民と化して

います。これは過去にない数字です。第二次世界大戦後、あるいは人類史上最大の数です。そのうち三、〇〇〇万人が難民です。紛争によって、あるいは政治的弾圧によって国から逃^{のが}れて、別の国へと安住の地を求める人が大勢います。

例えば、シリアでは現在、避難民が五〇〇万人、国内避難民をあわせると七〇〇万人になります。イエメンや南スーダン、マリやミャンマーのロヒンギャなどにも同様の状況があります。

私自身も難民の家に育ったのでわかるのですが、避難民が一番欲しているものは自分の家に帰ることです。しかし、それがかなわない。そうになると、普通の生活と将来を、自分の子どもたちには確保したいと考えるものです。

紛争ゆえに避難民と化した人々のことを考えると、まさにSDGsが設定している問題に行き当たります。

■ 具体的な解決策

No one will be left behind

— 誰一人取り残さない

問題を捉えるだけでなく、解決策にも目を向けなければなりません。気候変動への対策がその一つです。再生可能エネルギーなどを投資の機会と捉え、必要なエネルギーや食料を生産する方法を見いだすことです。アメリカではより多くの人が石炭よりも再生可能なエネルギーを使って暮らしています。日本でも多くの人がガソリン自動車から電気自動車に乗り換えていると聞きました。これこそがまさに将来への理想の道です。

公正なグローバル化というのが、不平等の問題に対する解決策です。不平等の間だけの不平等ではありません。貧しい国の中でもエリートは先進国の最も豊かな人たちと同じようなレベルで生活しています。豊かでない人たちが豊かな

国の中にもいます。都市と地方との間にも同じような格差があります。

SDGsの十七目標と一六九ターゲットは、それらに対する解決策です。SDGsは希望です。われわれが何を行うべきかがまさにここに述べられています。

気候変動に関しては、SDGsの十三番目の目標に明示されています。一九八〇年代、オゾン層破壊が大きな問題となりましたが、モントリオール議定書が採択されたことによって様々な業界を巻き込み、フロンガスの排出を止めることに成功しました。オゾン層破壊を止める対策がとられたのです。実際に問題をきちんと確認して、全世界が協働することによって、解決可能な道があるということが証明されたのです。

SDGsの「No one will be left behind — 誰一人取り残さない」という理念は極めて重要です。これは、自国のことだけを考え、他国のことを放っておいてはならない、ということ。もし自分の国のことだけを考えて行動すれば、

公正・平等にはならず、世界の諸問題をより深刻にしています。最悪、それが紛争をも引き起こす可能性があります。SDGsは紙の上での合意に止まらず、一人ひとりが実際に行動を起こして、諸問題の解決のために参加して行動していく必要があります。

■地球という一つの船

アントニオ・グテレス国連事務総長は、今年九月、平和で繁栄ある未来をつくるために、目の前に立ちほだかる脅威を七つ挙げました。核の問題、テロの問題、紛争問題、気候変動問題、不平等の増大。六つ目は技術革新の暗黒面。技術の進化はときに本来意図しなかったような結果、例えば、インターネットのサイバーセキュリティの問題や人工知能（AI）によって制御されてしまうかもしれないという危険性をもたらすことがあります。七つ目は避難民・移民による人々の移動です。

われわれは、いわば運命共同体です。他者に対する恐怖を乗り越えて、共に生きていくことが望まれます。われわれは全員、地球という一つの船に乗っています。隣国や世界の反対側の人々が沈没することがあれば、そこから影響を受けないということはありません。各国はSDGsを国境内の問題にだけ集約すべきではありません。あらゆる地球規模の問題に関して、力を合わせて対処しなければなりません。SDGsは将来に向けて、希望の光を与えるのです。それこそが、SDGsというアジェンダです。